

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Transitions of Museum Exhibition through the Examples of Canadian Northwest Coast First Nations and Hokkaido Ainu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009335

Transitions of Museum Exhibition through the Examples of Canadian Northwest Coast First Nations and Hokkaido Ainu

Reiko SAITO

Hokkaido Museum of Northern Peoples

カナダ北西海岸先住民と北海道アイヌの事例にみる 博物館展示の変遷

齋藤 玲子

北海道立北方民族博物館

Museums which own ethnographical collections have undergone a big change for their exhibitions and activities since the later twentieth century, especially after 1970's. Processes of collecting artifacts have been strongly challenged, and repatriation claimed by their original owners. And exhibits of indigenous cultures from viewpoint of dominant societies have been criticized and boycotted by indigenous peoples. Museums have not been played a role as only enough conservation of artifacts and explanation the culture in historic contexts.

Today Indigenous peoples' idea have been reflected in museum activities, such as building partnerships between museums and indigenous communities, increasing of museums (and/or culture center) which operated by themselves in countries like Canada, Australia and New Zealand. Then indigenous traditions have been represented as living part of contemporary societies as though the past.

This paper looks at some examples of how Canadian museum exhibitions have been changing in relation to Northwest Coast First Nations, drawing on backgrounds such as social condition, indigenous activity, law, budget, and a trend of study. Beside this report intends to overview transition of exhibiting Ainu culture in Japan.

Key Words: Museum Exhibition, Northwest Coast First Nations, Hokkaido Ainu, Canada
キーワード：博物館展示、北西海岸先住民、北海道アイヌ、カナダ

はじめに

20世紀の後半、特に1970年代以降、民族文化を対象とする博物館は、その展示や活動において大きな変化にさらされている。資料収集の経緯や、ドミナント（多数派、支配階級にある非先住民）社会の視点による展示の問題点が指摘されるようになり、資料返還運動や展示批判・ボイコットなどが起こった。博物館は資料を保管し、歴史的な説明を行うだけの場ではなくなってきた。

現在、カナダやオーストラリア、ニュージーランドなどの国々では、博物館と先住民との協力関係が築かれ、先住民自身の運営による博物館（および文化センター等）も増えつつあるなど、先住民の意向が博物館活動に大きく反映されるようになってきている。そして、先住民文化が過去のものではなく、現在も生き続けているものであると表象されるようになってきている。

ここでは、筆者がこの数年調査を行ってきたカナダの博物館と北西海岸先住民の関係について、社会状況、先住民運動、法、資金、学問動向などの背景に注

目してその変遷をたどる。また、日本におけるアイヌ文化展示の変遷についても、概観する。

カナダにおける先住民関連の博物館

カナダには1000を越える博物館（および類似・関係機関）があるが、そのうち、先住民文化が展示の主たるテーマとなっている館は多く見積もって2～3割程度、美術・工芸品などを所蔵し、副次的あるいは特別展等一時的に展示している館が半数程度であろうと考えられる（齋藤 2006）。

日本でもお馴染みのジェームズ・クリフォードの著作に「北西海岸の4つのミュージアム」という小論がある（Clifford 1997）。同著では、ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館（RCBM: Royal British Columbia Museum）とブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館（MOA at UBC: Museum of Anthropology at University of British Columbia）、ウミスタ文化センター（U'mista Culture Centre）、クワギウルス博物館（Kwagiulth Museum）

の4館を比較している。このうちクワギウス博物館は資金難や人的理由などにより閉館中であるため、発表者は詳しい調査を行うことができなかった。本稿ではこれらの館に加え、国立文明博物館(CMC: Canadian Museum of Civilization)を、カナダの代表的かつ先駆的な博物館として報告する。

半世紀の動向

まず、20世紀後半からのこれらの博物館の変遷を概観してみたい。

『ミュージアムの政治学 カナダの多文化主義と国民文化』のなかで、著者の溝上は、1967年の連邦100周年を記念して開催されたモントリオール万博をインディアン・アートの公的認知が行われた契機と位置づけている(溝上 2003)。ちょうどこの頃から1970年代にかけての時代は、博物館の開館ラッシュであった。大規模館はそれ以前から開館していたか、あるいは母体が設置されていたが、多くの場合、この時期にリニューアルオープンしている。

この時代は60年代の英・仏二文化主義から70年代の多文化主義へと政策が方向付けられ、民権運動も高まりを見せ、先住民への配慮も次第に拡充していった頃とされる。

博物館の展示では、それまでのように先住民文化を「過去の遺産」としてのみ扱うのではなく、移住者による社会・文化への影響などの歴史や、当時係争中であった土地権交渉も冷静に語られ、現在も進行中であることが表象されるようになる。芸術という切り口においては、特定の個人(アーティスト)も取り上げられるようになってくる。

文明博物館の前身であるオタワの国立人類博物館(NMM: National Museum of Man)は、この時期大規模な改修を行い、74年10月に再オープン後まもなく翌75年に北西海岸インディアン文化の展示ホールをオープンさせている。

ブリティッシュ・コロンビア(BC)の州都ビクトリアにあるロイヤルBC博物館は、1886年設立、1968年現在の場所に移転、75年に先住民ギャラリー(First Peoples Gallery)がオープンした。欧米人の到来以前と以後の変化を軸に、生業・儀礼などをバランスよく紹介したもので、実物大のロングハウスやジオラマ、古老の語りと連動させた仮面のコーナーなど、先住民(First Nations)の協力なしでは実現できない大掛かりな展示も多い。

UBCの人類学博物館は1949年に開館、1976年に現在の場所に移転し、リニューアルオープンした。展示室内には古いトーテムポールなどが多数ある一方、ハイダ出身の国民的アーティスト、ビル・リード(Bill Reid)をはじめとする現代の作家の作品も置かれた。ガラス張りの展示室からは屋外に復元された家屋やトーテムポールも同時に見ることができ、現代まで続くアートの伝統を強調している。

この頃UBCの博物館で勤務経験をつんだクワクワカワックウ出身のグロリア・C・ウェブスターは、75年故郷のアラートベイに戻り、その後カナダにおける先住民展示のキーパーソンとなる。G.ウェブスターは10回近く来日していることもあり、日本の研究者や博物館関係者、アイヌ文化関係者らにはよく知られた存在である。ポトラッチ禁止時代(1884~1950年)の1921年末に父親らが開催したポトラッチの祭祀具などが、翌年政府によって没収され、各地の博物館等に収められた。これらの資料返還運動を行い、オタワやトロントなど主要な博物館から同意を獲得、開催当時の関係者が多く集住する二つのコミュニティに博物館が建設され、そこに返還されることとなった。1979年開館のクワギウス博物館と、80年開館のウミスタ文化センターがそれである(ウェブスター 2003)。

こうしたなか、82年の憲法改正に向け、先住民の権利獲得運動は一層活発化した。グレンボウ博物館(Glenbow Museum)で行なわれた特別展「魂はうたう(The Spirit Sings: Artistic Traditions of Canada's First Peoples)」に対する地元先住民のボイコット(1988年)を受け、博物館と先住民に関する特別委員会(Task Force)が設けられた。その後、カナダ博物館協会(CMA: Canadian Museum Association)と先住民会議(AFN: Assembly of First Nations)は協同して、先住民資料の重要性の再認識、展示等への先住民の介入、先住民が利用する際の便宜、資料返還、先住民の研修などを進めてきている(Wilson 1992; AFN & CMA 1992)。

クワクワカワックウのポトラッチ・コレクション返還以降、国内の主要な博物館のみならず、1980年代半ばにはカナダ博物館協会など全国組織の場で先住民文化コレクションの取り扱いや、共同作業に関する議論が盛んになってくる。例えば、カナダ博物館協会発行の『MUSE』誌では87年に「The Emerging Indian Point of View」、88年に「Museums and the First Nations」といった特集が生まれ、過去のステレオタイプからの脱却や資料の所属・返還に関する論評や事例報告が展開されている。

特別展などの企画においては、文化人類学者と先住民のアーティスト(あるいは文化保持者)を学芸員(curator)として雇用するのが、80年代以降の北米のスタンダード・モデルとなる。先住民の学芸員は、資料の属する(していた)社会の代表として、展示に先住民の視点を導入した。

さらに一歩進んで、ロイヤルBC博物館が企画した1999~2000年の巡回展「霧の中から(Out of the Mist: Treasures of the Nuw-cha-Nulth Chiefs)」は、先住民カウンスルと議定書を交わし、多くの関係者を取り込んだ委員会方式で行なわれた(Black 2001a)。この展示は、博物館学の本でもケーススタディとして取り上げられ(Black 2001b)、またカナダ博物館協

会のプレゼンテーション部門で2000年の協会賞を受賞するなど、関係各方面からの注目を浴びた。

クリフォードの評価 型にはめられない現在の活動

J・クリフォードの各館の評については省略するが、当該館の関係者らへのインタビューでは「あれは副題のとおり『Travel Reflections (和訳本では“旅の反省的考察”)』に過ぎない」との答えが返ってきた。また、彼は70年代に企画された常設展のみを取り上げているが、クリフォードが訪れた88年以降、いくつもの進展がある。例えば、98年に合意したニシュガ協定(Nisgaa Agreement)を受け、ロイヤルBC博物館では資料を現地に返還すると同時に、2002年に映像やコンピュータを多用して協定の内容や現在の文化を紹介する「ニシュガ(Nisgaa: Peoples of the Nass River)」を常設展示室に新たに設けた。

クリフォードが「写真をまったく展示していない」と報告したUBC人類学博物館には、近年の先住民の様子がカラー写真で紹介されており、パソコンを利用した双方向型の解説も取り入れられている。2002年からはリニューアル・プロジェクトが立ち上がっており、調査や研究のために来館する先住民を受け入れやすくする施設整備や、資料情報のデータベース化・ネットワーク化・公開への準備に多額の予算がつけられている。プロジェクトの遂行にあたり、3つの先住民団体との間で共同研究のためのパートナーシップが結ばれている(2004年10月時点)。

カナダのまとめとして国立文明博物館を例に、90年代以降の潮流となったと考えられる展示コンセプトと手法について報告したい。

オタワの人類博物館は、89年に隣接するケベック州ハルに文明博物館として新規オープンした。文明博物館の1階はグランドホールと呼ばれ、北西海岸先住民の6つの住居を復元し、内部に各集団に特徴的な資料などを展示している。文化全般を概説するようなものではなく、それぞれが主張したい事柄を重点的に取り上げている。また、新しい要素も随時加えている。この展示には、企画段階から前述のG. ウェブスターをはじめとする、北西海岸先住民の人びとが加わっていた(Laforet 1992)。

企画から5年ほどで完成したグランドホールに比べ、イヌイトや他の先住民、メティスをも含んだファースト・ピープルズ・ホールは10年以上の歳月をかけてようやく2003年にオープンした。ウェブスター氏は、展示の諮問委員会の先住民側メンバーに博物館の経験者が少なく、広範な地域の事情の異なる集団の意見をまとめるのは非常に大変であり、構想に長い期間がかかったと話した(ウェブスター 2003; 筆者 2004インタビュー)。

展示のコンセプトは、次の4つの主張「私たちは今もここに生きている(We Are Still Here)」「私たちは

貢献している(We Contribute)」「私たちは多様である(We Are Diverse)」「私たちは大地と古くからの結びつきをもっている(We Have an Ancient and Ongoing Relationship with the Land)」である。

4つのうち1つめと3つめは「顔の見える展示」とも呼べる手法が採られている。「私はこんな生活・活動をしている」「私はこう考える」と複数の人物に語らせ、無理に総括しないという方法は、カナダの博物館では近年多く見かける。そして、2つめと4つめは自然に対する先住民の知恵が現代の環境問題解決のヒントになるなどの視点で展示され、過去の文化の紹介にとどまらず、現代的なテーマとして関心をもたれるよう仕向けられている。

こうして見ていくと、北西海岸の先住民と博物館の関わりは比較的明るい展望を持つように思える。しかし、同じような協力関係が、他の民族においても展開できるかという点、簡単ではないだろう。北西海岸先住民はもともと首長制の階層社会であり、親族のつながりも強く、民族資料の所有者(権)も非常に明確であった。交渉相手をはっきりしていることが、博物館との関係の発展において重要なポイントであった。さらに、その物質文化の芸術性が、博物館や美術館において人々を惹きつけ、理解されやすい要素となっている。そして、バンクーバーやビクトリアという観光地、首都オタワを控える地ならば、多くの観覧者が見込め投資効果のある博物館運営が可能だからだ。

日本におけるアイヌの展示事例

カナダにおける博物館展示について見てきたが、複数の先行研究があることに加え、他国の事例ゆえに客観的に概観できたともいえる。一方、日本におけるアイヌの展示については、カナダほどの活発な議論や先行研究はなされていない。しかし、この十数年だけでも、アイヌの人びととその文化を取り巻く状況は大きく変化しており、博物館展示もまた無縁ではない。

戦後のアイヌ民族とその文化

日本で博物館が多く建設されたのは、明治初期に新しい地方制度が敷かれてから、100周年を迎える1970年前後である。高度経済成長もそれを後押ししただろう。時代としてはカナダと相似している。

博物館展示の変遷について報告する前に、20世紀後半以降のアイヌ文化に関連する事項について概略を述べる。アイヌの権利回復運動が盛んになったのは、1960～70年代である。アイヌの最大の団体である(社)北海道ウタリ協会は、戦後まもなく1946年に(社)北海道アイヌ協会として設立されたが、61年に現在の名称に変更後、活動が盛んになった。当初は主に福祉に力が入れられ、文化に目が向けられるようになってきたのは80年代に入る頃からである。

60～70年代はまた、北海道観光ブームの時代と重なる。この頃、アイヌ文化は観光資源の一つであり、経

済的に一部のアイヌの人びとの生活を支えていた。70年代後半頃から、観光地においてアイヌを見世物とすることや誤解を招くような説明などに対する批判や改善の声が、内外から強まってきた。そのようななか、1984年には観光地で演じられていた伝統的な舞踊が国の重要無形民俗文化財に指定され、アイヌの人びとの間に伝統文化の再生・継承についての意識がより高まった。87年に北海道の助成を受けて開催されるようになったアイヌ語教室（当初2地域）は各地に広がり、89年からはアイヌ民族文化祭も始まって2005年に18回を迎えた。

1993年の国際先住民年（International Year of the World's Indigenous People）には、北海道内のみならず、東京や大阪の国立博物館においてもアイヌ文化の展示が開催されるなど、関連事業が多数行われた。そして、97年北海道旧土人保護法に代わって「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が制定・施行された。この法律によって（財）アイヌ文化振興・研究推進機構が設立され、アイヌ文化に関する自主事業及び助成事業が飛躍的に増加した。

アイヌに関連する展示をもつ博物館

さて、具体的な博物館の状況や展示について見ていく。

まず、北海道最大規模の博物館である北海道開拓記念館は、1971年に開館した。当初は、旧石器時代から昭和初期（戦前）までをほぼ時代順に展示していた。20周年を機に92年に常設展示を改訂し、展示品の時代も1970年頃まで延長、映像では90年代の様子も取り上げられている。アイヌ文化に関する改訂時の要点は、アイヌ民族の成立と文化を時間的経過の中で客観的に位置づけるということで、伝統的なアイヌ文化のみならず、江戸時代の和人と関係や、明治の開拓期の苦難なども紹介されている（北海道開拓記念館 1994）。常設展では、現代の様子は映像のみの展示だが、特別展や各種の普及行事等で、現代のアイヌ文化について紹介する場を設けている。

アイヌ文化専門の博物館として、白老町のアイヌ民族博物館を挙げなければならない。白老は、明治期からアイヌの風俗を見ることができるとして知られていた。1965年に現在地に伝統的な住居や売店などが移設され、67年に現博物館の前身である白老民俗資料館がオープンした。76年に財団法人が設立され、復元住居や資料館も引き継がれた。84年にアイヌ民族博物館が新築・開館した。博物館内でアイヌの歴史と文化全般を展示するほか、野外で復元住居や動物・植物についても紹介している。また、踊りや工芸などの実演も行われ、体験的な講習会等も多く開催されている。儀礼の復興や、職員の研修にも盛んに取り組んでいる。同館は学芸員をはじめ、職員の多くがアイヌ民族である。ちなみに来館者の多いことでは国内でも有数で、

最盛期（1991年）には年間の入場者が87万人を数えたが、近年は25～30万人で推移している（アイヌ民族博物館 1996）。

次に国立民族学博物館について見ていく。同館は、大阪万博の跡地（吹田市）に大学共同利用機関として設置され、1977年に一般公開された（2004年から独立行政法人）。約70名の研究者を抱える大規模な研究博物館で、世界中の民族を対象としている。アイヌについては、東アジア展示場の一角に、伝統的な文化を中心としながら、現代の工芸なども若干紹介している。93年の国際先住民年ならびに2003年にアイヌ文化の大規模な特別展を行っている。また、アイヌ文化伝承者らの研修も受け入れてきた（Ohtsuka 1997）。

民族学の分野とは異なる視点でアイヌの展示を行っている博物館についても紹介したい。（財）大阪人権博物館は、大阪府や大阪市の出資による財団法人で、1985年に開館（当初の名称は大阪人権歴史資料館）した。アイヌ民族については、歴史や文化のみならず、権利回復や文化復興の運動などに関して、出版物や映像なども多用して紹介している。近年では2003年に「アイヌ民族の青春群像」という企画展を行い、1970年代に権利回復や差別撤廃のために活動した若者の様子、および現在アイヌ文化を伝承する20～30代の個々の姿を紹介した（大阪人権博物館 2003）。1995年にリニューアルし、2005年末にも再リニューアル・オープンした。

（財）アイヌ文化振興・研究推進機構は、毎年、工芸品を主体とした大規模な巡回展を、上述の博物館のほか、道外の県立博物館等大規模館および、道内の中規模館で開催してきた。このなかで注目すべきは、2003～04年に行われた「アイヌからのメッセージ」展で、アイヌの工芸家らを中心とした実行委員会が企画をしたものである。同展では、資料は新作を中心にし、個々人の文化継承にける思いや展望についてメッセージが付された（アイヌ文化振興・研究推進機構 2003）。

アイヌに関する博物館展示の紹介は、以上とする。

まとめにかえて

カナダでは、1980年代には先住民の学芸員が展示の企画・運営にあたるのがスタンダードとなり、1990年代には個々人の顔の見える展示が主流になっていた。日本では、ようやく最近になってこうした取り組みが増えてきた。また、カナダでは、インターネットが活用され、「バーチャル・ミュージアム」というウェブサイトに相当の力が入れられている。この点でも、日本はまだカナダに追いついていない。

現在、日本の博物館は観覧者数の減少に歯止めがかからない中、予算・人件費ともに削減され、閉館や休館に追い込まれる館もあり、公立館の民間委託が進むなど運営的に厳しい状況にある。大規模な予算でリニューアルが盛んに進められるカナダの状況とは、対

照的である。

しかし近年、異文化展示の在り方や各種メディアにおける民族文化表象に関する議論は活発になってきている（出利葉 2001；飯田 2003；竹沢 2004；本多 2005など）。アイヌ民族自身が企画に加わる展示や、アイヌ民族の学芸員も増えている。常設展示の大幅な変更は難しいが、特別展やイベント等、少ない予算のなかで、現在のアイヌ民族と文化の状況を伝えていくために知恵を絞り、アイヌ文化伝承者らと共同作業を増やしていくことは可能であろう。カナダをはじめとする先駆的な事例を参考にしつつ、日本型の博物館における先住民文化表象のあり方を模索していきたいと思う。

おわりに

本報告は、日本学術振興会科学研究費「カナダにおける先住民のメディアの活用とその社会・文化的影響」（代表者：スチュアート ヘンリ・放送大学教授）の成果の一部である。前半のカナダの事例については、2005年5月の日本文化人類学会での発表を改変したもので、後半のアイヌの事例については新たに加えたものである。

主な参考文献

（財）アイヌ文化振興・研究推進機構編

2003 『アイヌからのメッセージ ―ものづくりと心―』（財）アイヌ文化振興・研究推進機構

（財）アイヌ民族博物館編

1996 『財団法人設立20周年記念誌 二十年の歩み』（財）アイヌ民族博物館

飯田卓責任編集（国立民族学博物館編）

2003 「特集 マスメディア社会に向き合う人類学」『民博通信』102: 1-17 国立民族学博物館

ウェブスター、グロリア

2003 「先住民族と博物館」（パネル・ディスカッション）大塚和義・吉田憲司編「再生する先住民文化 ―先住民族と博物館」報告書（アイヌ文化振興法制定5周年記念フォーラム）43-74国立民族学博物館

大阪人権博物館編

2003 『アイヌ民族の青春群像』 大阪人権博物館

齋藤玲子

2006（印刷中）「研究ノート：カナダ北西海岸先住民関連の博物館の概況」『北海道立北方民族博物館研究紀要』15: 85-94

竹沢尚一郎責任編集（国立民族学博物館編）

2004 「特集 ミュージアムと民族学をつなぐもの」『民博通信』104: 1-17 国立民族学博物館

出利葉浩司編

2001 『民族学的情報伝達装置としての博物館の意義に関する基礎的研究（アイヌ文化展示を中心に）』（科学研究費補助金・研究成果報告書）北海道開拓記念館

北海道開拓記念館編

1994 『常設展示改定事業報告』北海道開拓記念館

本多俊和（スチュアート ヘンリ）

2005 「メディアと先住民：表象する側とされる側」本多俊和・大村敬一・葛野浩昭編『文化人類学研究 ―先住民の世界―』pp. 211-223 放送大学教育振興会

溝上智恵子

2003 『ミュージアムの政治学 カナダの多文化主義と国民文化』 東海大学出版会

Assembly of First Nations (AFN) and The Canadian Museums Association (CMA)

1992 Task Force Report on Museums and First Peoples: Jointly sponsored by Assembly of First Nations and the Canadian Museums Association. *Museum Anthropology* 16(2): 12-20

Black, Martha

2001a Out of the Mist/HuupuKwanum・Tupaat; Treasures of the Nuuchah-nulth Chiefs. An exhibit organized and circulated by the Royal B.C. Museum, Victoria in partnership with the Nuuchah-nulth Tribal Council. *American Indian Art Magazine* 25(2): 44-53, 92-94 Scottsdale, AZ

2001b HuupuKwanum・Tupaat: Out of the Mist, Treasures of the Nuuchah-nulth Chiefs. Lord, Barry ed. *The Manual of Museum Exhibitions*. pp. 35-38 Altamira Press

Canadian Museum of Civilization

2002 *Canadian Museum of Civilization*. Hull

Clifford, James

1997 Four Northwest Coast Museums: Travel Reflections. *Routes: Travel and Translation in the Late twentieth Century*. Cambridge: Harvard University Press（毛利嘉孝ほか訳『ルーツ』月曜社）

Hawthorn, Audrey

1993 *A Labour of Love: The Making of the Museum of Anthropology, UBC The First Three Decades 1947-1976*.
Vancouver: UBC Museum of Anthropology

Laforet, Andrea

1992 *The Book of the Grand Hall*. Hull: Canadian Museum of Civilization

Ohtsuka, Kazuyoshi

1997 Exhibiting Ainu Culture at Minpaku: A Replay to Sandra A. Niessen. *Museum Anthropology* 20(3):108-119

U'mista Culture Centre

2005 *T'sit'sak'alam*(News). Fall/Winter 2005. U'mista Cultural Society

Wilson, Thomas H., Georges Erasmus, and David W. Penne

1992 Museums and First Peoples in Canada. *Museum Anthropology* 16(2): 6-11